

2017. 12. 20 (水)

## 死者と生きる

對馬 路人

知人の訃報に接して

先ほどご紹介がありましたけれども、社会学部の教授の中では古だぬきといいたいでしょうか、33年間、社会学部で教鞭を執らせていただきました。このチャペルでお話するのは最後ということになります。年を取ってくると、楽しいこともあるのですが、いろいろ悲しいことも多く、皆さんにふさわしいお話かどうか分かりませんが、お聞きいただければと思っています。

最近、ちょっと悲しい体験しました。私のところに、正式の学生さんではないのですが、聴講生ということで長いこと来ている社会の方がいらっしゃいます。私より十数年年上の方です。ときどき、私のゼミにそういう年配の方が来られます。今も来ている方もいらっしゃるのですけれども、その方は二十数年、私のゼミに出てきていたと思います。詳しい話は私も結局、聞きそびれてしまいましたけれども、ご本人の話によりますと、西宮にお住いの方で、きっかけは、阪神淡路の震災があり、そのことでいろいろ思うところがあって、会社を辞めて、宗教の勉強をしてみたいということでした。関学だけではなくて、仏教が割合好きな方だったので、龍谷大に聴講生に行ったりされていたようで

す。私のゼミ、あるいは授業に毎年のように出ておられました。最初に来られた時も、既に大分リタイアの年齢には近かったと思います。ですが、比較的、経済的にも余裕もあるということで、そういうことができたのかもしれない。

私のゼミでは、夏秋に、調査実習の旅行をします。最初の頃は国内です。国内でも近場で、車で回れる範囲ということで、関西圏を中心に中国、九州ぐらまで行ったこともありますし、西は名古屋とかその辺なのですけれども、それぞれの地域の宗教を訪ね歩きたいなことをやっていました。その方はそういう調査に非常に、熱心に参加されていました。途中から、ゼミで海外の実習をやるようになりました。実習費はそんなにたくさん使えないものですから、もちろんその範囲をちょっと超える部分もあるのですが、大体アジアの地域、韓国、中国、台湾、東南アジア辺りまで、毎年回り、その地域の宗教に触れる、そんなことをやってきました。その調査実習にも、毎年という訳ではありませんが、度々参加されました。そもそも海外の調査もやろうと言いついたのが、その方でした。例えば龍谷大などに行くと、ゼミで、インドのブッダの足跡をたどるというツアーがあったりして、それに参加した経験を持って

いるということで、行ってみませんかと自ら提案され、また、旅行会社などを紹介していただいて、やりだした次第です。

そういう意味では、結構長いお付き合いになり、二十数年間の長きにわたりました。毎年、大体、春学期になると、授業、あるいはゼミが始まる前に、「今年もよろしくお願ひします」とご挨拶に来られるのですけれども、今年の春、ご挨拶に来られたときに、「病気が見つかった、がんが見つかった」、しかし手術はしないと話しされました。はっきりどんな状況か、おっしゃらなかったのですが、見た目には、普段と同じような感じでしたので、また、授業の時間も迫っていましたので、余り長い話はできませんでした。一方で、手術はしないなどおっしゃったので覚悟を決めておられるのかな、そういう印象も受けました。しかし僕は、こんなに早く逝かれるとは思っていませんでした。律儀な方で、必要はないと言うのですけれども、毎年お歳暮を贈ってこられるのです。それで、今年も贈ってきまして、まだしっかりしておられるなと思っていたのですが、その2日後に、突然、お亡くなりになったと、奥様から訃報をいただき、びっくりしました。結局、春、ご挨拶に来たときが最後のお話という形になって、もう少しじっくりお話ができればよかったなと後悔をした次第です。

### 死者を背負う

自分もだんだん、そういう世界に近づいてきているので当然なのですが、もちろん両親を送りましたし、先輩の方、いろいろお世話になった方、場合によっては自分とほとんど同年代、同期の人、同じ研究仲間とか、親し

くしていた方が亡くなるが増えてきました。皆さんのような若いときは、これから、どんどん、いろいろなものを吸収して、ゲインをしていくというか、物事を吸収して豊かになっていくということでしょうけれども、年を取ってくるとロスが多くなってきます。ゲインがない訳ではないでしょうけれども、ゲインよりもロスが多くなってくるといいますよ、か、そういうような年齢を迎えています。

そういう意味では少し寂しい思いというものもある訳ですけれども、ただ、そういう体験をしながら、最近思うことは、単なる親しい人が亡くなるということは単なるロスではないというのか、全てそれで何がなくなってしまふということではないといひましょうか、心の中には、うまく言い表せないのですけれども、亡くなることによって、かえってその人の存在感が大きくなることもあるのです。生前とのお付き合いの中でいろいろなことがあって、だけれども、本人には直接言えないようなこと、思い、いろいろおわびしなければいけなかったこともあるだろうし、感謝しなければいけなかったようなこともありますけれども、そういうのが残される訳です。残されることによって、その人の存在感が心の中で大きくなって、それによって、ある種の死んだ人との対話、対話にはなっていないのかもしれないかもしれませんが、語りかけるみたいな気持ちになったりします。生きているときよりも、かえって素直な気というか、語りかけができる、そんなところもあつたりします。生身の人間ではないだけに、心の中での対話がしやすい、そんなようなところもあるかと思ひます。そういう意味では、肉体は亡くなるのですけれども、そういう方はずっと心の中には住み続けています。特に、離

れていても、毎年のように年賀状でやり取りしている人については、普段、余り考えることはないのですが、亡くなると、余計に、ときどきふっと思い起こしたりすることが多くなっているということを思います。

死者に対していろいろ思いを持つとうとするというのは、ポジティブな意味だけではありません。社会心理学の言葉で、サバイバーズ・ギルトという概念があります。授業などで聞いたことがある人もいかもしれませんが、生き残った人の罪責感というのか、例えば阪神の震災ですとか、東日本大震災で、身近な人を亡くされた方、もちろん、そういう意味では心に傷を負うのですけれども、それにプラスして、あの人は死んだのだけれども、自分は生き残ってしまったのか、ものすごく罪の意識に苛まれる。自分自身は、親しい人を失って傷ついているのだけれども、それに加えて、さらにそういう罪の意識も抱え込むことがあります。この概念が有名になったのは、アメリカの社会心理学者で、ロバート・J・リフトンという方が、戦後、日本で、原爆の被災を受けた広島を調査されたのです。そこで、生き残った被爆者の人が非常にそういう罪悪感を抱えている、生き残ってしまったことの罪悪感。別に、それは本人のせいでも原爆が落ちた訳ではないし、本人のせいで生き残ったわけではありません。その意味で、全く積極的な罪ではない訳ですけれども、それにもかかわらず、そういう罪の意識を抱え込んでいるというようなことを言われています。そういう意味では、自分の心の中に死者を抱え込むというのはある意味の重荷でもあるといえましょうか、しんどいことでもあります。

諸君らにとっては、おじいさんの世代の話

になると思いますけれども、私ももちろん戦中派ではなく、戦後派なのですけれども、父親とかの世代は、いわゆる戦中派の世代、太平洋戦争、第二次世界大戦を体験した世代です。要するに、同僚が戦場で亡くなって、自分は生きて帰ってくるという体験をした人がたくさんいた世代です。一方では、そういうサバイバーズ・ギルトを抱えながら、一方では、だからこそ、自分はその人たちの思いを背負って、さらに頑張らなきゃ、日本の復興のために頑張らなきゃいけないとか。それが日本の復興の心の原動力になった、みたいな言い方を、ときどき聞いたりします。自分の父親のことなども考えると、多少、わかる感じもします。要するに、そういうネガティブな感情もポジティブな形で生きる力にする、こういう経験になる、そういうふうに思いたいなと思っています。

## メモリアリズム

私は宗教社会学を教えています。普段から日本人の宗教意識とか宗教行動について教えたりしている訳ですけれども、日本人の場合には、亡くなった親とか、先祖とのかかわりが宗教行動とか宗教意識の面で重みが結構大きいと指摘されていて、僕もそういうことは思う訳です。ただ、祖先崇拜とかいうと、かつては尊いものとして拝むといいましょいか、崇拜の対象にするというニュアンスで受け止められてきましたが、最近はどうもそうでもないというふうな言い方がされます。宗教社会学の用語でいうと、メモリアリズムという言い方があります。死者のメモリー、記憶を大切にするとか、それを通して追慕をするということです。簡単にいうと、日本人の

場合もし仏壇があれば、その中の亡くなった方の位牌に手を合わせるのですけれども、それはある種、死者との対話を行っているのだと、崇拝しているというよりも、むしろ対話を行っているのだ、そういうふうな傾向が最近強いのではないかということが言われたりします。それをメモリアリズムというのですけれども、要するに、亡くなられるのだけれども、追慕という形で死者との対話をしながら、死者に、自分もこんな状況ですと、お父さん、お母さんに報告しながら、見守ってください、そんなニュアンスで語り掛ける訳です、そういう意味では、死者との対話も生きるというのは現代の日本人にとっても結構重要な意味を持っていると、私も今、思っています。

それから、これはターミナルケアに関するお話です。これは、いわゆるスピリチュアルケアをやっているお坊さんからお話を聞いたことがあったのです。スピリチュアルケアの場合には、特定の宗教の立場から、その宗教を信じれば救われますよ、そういう安心を提供するのではなくて、自分の心の中にある、もともと持っているような要素を引き出して、それによって心の平安、死を受け入れる、そういう気持ちを育むというやり方を取ります。その方がおっしゃるには、日本人は家が仏教の人でも、極楽浄土に往生するか、阿弥陀様に救いを求めるとか、要するにそういう仏教的な形で多くの人が死を受け入れるのは殆ど無いそうです。むしろ、夢の中で、親が出てきたとか、妻、夫が出てきた、要するに、そういう身近な死者との関係、これを結び直すといいたいでしょうか、そういう中で死を受け入れる、そういうことがよく行われるというふうなことをお話しされています。

た。そういうふうなこと、死者とともに生きるといいたいでしょうか、そういった実感を最近、自分自身でも感じるようになりました。

### 出会いと別れ、そして生き続ける死者

ちょっと湿っぽい話で、若い人がこれから生きる糧になるようなお話ではないかもしれませんが、要するに、出会いがあれば必ず別れがあるということです。そして、別れれば全部無になる訳ではないということです。もちろん出会いは大切なのです。私も、人生の中で、いろいろな出会い、別れを経験しました。人生の質を高めるという上で、どういった出会いができるかどうか、どういった良き人との出会いができるかどうか、これは本当に大切なことです。私も宗教の研究をしていますから、人と宗教との出会いを考える場合にも、宗教そのものというよりも、人と宗教者、具体的な宗教を担う人との出会い、これが実は非常に大きな要因になっているということも日々実感しているところです。そういう意味では、豊かな出会い、いい人に、尊敬できる人と出会う、これが人生を豊かにする上で大変大切なことかと思えます。

さらにいえば、こういう人たちとも別れなければいけない、しかし、それでも、それは決して無にならない、それは別れて失われた、そういう関係が、心の中で生き続けることによって、新しい自分を生きる上での、新しい意味や力になってくれる、そういう面もあるということを感じる次第です。

年寄りの繰り返言みたいでな話だったと思いますが、これで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

(社会学部教授)